

夏場の皮膚炎、「やけど虫」も鑑別に

線状の皮疹を見たら虫との接触歴も積極的に問診を

気温が上がり、屋外での活動が増えるこの季節は、虫による皮膚疾患が頻発する。アオバアリガタハネカクシは、払いのけたときに体内の毒素が皮膚に触れることで線状の接触皮膚炎を引き起こす。症状が熱傷に似ているため「やけど虫」と呼ばれている。

「昨日からおでこがヒリヒリすると思ったら、今朝はそこに白いブツブツができていました」。松田ひふ科（福岡県糸島市）を受診した60歳代の女性は、驚いた様子でそう話した。女性の額の右側には7cmほどの長さの線状の皮疹があり、その上に小さな膿疱が並んでいた（写真1）。

院長の松田哲男氏は女性に、最近おでこに触れたものがないかを尋ねた。女性は、しばらく考えた後、2日ほど前に散歩した際、小さな虫が飛んで来ておでこに付いたと説明した。そのとき手でその虫を払ったところ、虫が潰れてしまったという。

松田氏は、前額の線状の皮疹と「虫を潰した」という女性の話から、虫の体液による接触皮膚炎を疑った。

虫の中には、体液に毒性の高い化学物質を持つものがある。ハネカクシ科アリガタハネカクシ亜科に属するアオバアリガタハネカクシ（写真2）もその1つ。成虫でも7mmほどの大きさにすぎないが、卵から成虫までの生活環の全てで、体内にペデリンという有毒な物質を含む。

体内に毒を持つ虫を潰すと…

虫による皮膚疾患に詳しい兵庫医科大学皮膚科学准教授の夏秋優氏は「アオバアリガタハネカクシは体が軟らかいため、皮膚に付いたのを払う力加減によっては体が潰れてしまう」と解説する。蚊のように吸血したり、ハチのように針から有毒物質を注入するようなことはない。

写真2 アオバアリガタハネカクシの成虫（提供：夏秋氏、写真3～4も）



払いのけたときに軟らかい体が潰れて、ペデリンを含む体液が皮膚に付着すると、強い症状を伴う接触皮膚炎を起こす。

この虫の体液は、払いのける手の動きで皮膚になすり付けられる。そのため、体液によってできる皮疹が1本の線状になるのが特徴だ。虫を叩き潰してしまえば点状の病変となるが、ほとんどの患者は、皮膚に付いた虫を払いのけようとするため虫をすり潰した状態になり、線状に症状が現れるという（写真3）。

その症状は次のような経過をたどる。体液に含まれるペデリンが皮膚に触れてから数時間から半日ほどでヒリヒリとした痛みや灼熱感が表れる。翌日には線状の発赤が、さらに炎症の程度が強い場合には、発赤の上に弛緩性の膿が混じった水疱ができる。その後、破けるとびらんになる。炎症は1週間ほど続くことが多い。

この激しい痛みと膿疱が熱傷の症

写真1 60歳代女性の前額右側にできた線状皮膚炎（提供：松田氏、写真5も）



写真3 アオバアリガタハネカクシの体液に含まれるペデリンによる線状皮膚炎



本例では炎症が弱く、膿疱は生じていない。

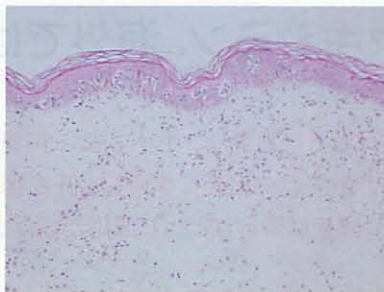
状に似ているため、アオバアリガタハネカクシは俗に「やけど虫」と呼ばれている。「本来は、体液に含まれるカンタリジンが痛みと水疱を伴う熱傷に似た症状を引き起こすことから、アオカミキリモドキが『やけど虫』と呼ばれていた。最近、アオカミキリモドキは個体数が減ってしまったためか、今では『やけど虫』といえばアオバアリガタハネカクシのことを指すようになった」と夏秋氏は明かす。

アオバアリガタハネカクシによる皮膚炎は皮膚が露出した首筋や顔、腕など、上半身を中心に現れる。冒頭の女性も臨床像や問診から、アオバアリガタハネカクシが持つペデリンによる線状皮膚炎と松田氏は診断した。

夏秋氏が自身の皮膚で試した研究によれば、ペデリンによって炎症を起こした皮膚を生検してみると、炎症部位の表皮の浅い所に好中球が集まっていたという(写真4)。炎症が強くと膿疱ができることも分かっており、誤って眼にペデリンが入れば、失明する危険もある(写真5)。

アオバアリガタハネカクシは日本全国に生息し、水田や畑、湿った草地を好むため、郊外に多く生息している。九州地方では特に被害に遭う人が多

写真4 ペデリンによる線状皮膚炎の病理組織像



表皮の浅い所に、好中球が集まっている。

く、松田氏のクリニックでは例年50～100人ほどの患者がやって来る。「気温が上がリ、農作業が本格化する4月下旬から10月に患者が多い」という。

治療はステロイドとワセリンで

アオバアリガタハネカクシは光に集まる習性があるため、松田氏によると、夜間に室内に侵入してくるケースが多い。ライトを点灯させて自転車やバイクで走行しているときや、家庭用の花火を楽しんでいる中でも遭遇しやすい。問診では、症状が現れた

写真5 眼周囲に線状皮膚炎を起こした男児



顔に飛来してきた場合、眼内に虫の体液が入る恐れがある。この男児は払いのける際に眼をつぶっていたため、虫の体液が眼に入ることは避けられた。



「ペデリンによる線状皮膚炎では、早めに外用ステロイドを使用するとよい」と語る兵庫医科大学の夏秋優氏。

部位に関するエピソードを積極的に聞き出すようにしたい。

ペデリンによる線状皮膚炎の治療は、外用ステロイドによる炎症抑制・症状緩和と、ワセリンなどによる患部の保護が中心となる。

ただし、「炎症が強くなり過ぎる前に使用しないと、思ったほどステロイドの効果が得られないようだ」と夏秋氏は指摘する。膿疱が破れ、びらん状になってしまった場合は、細菌感染を防止するために外用抗菌薬の処方が必要になることもある。

「炎症が強い場合は、色素沈着を起こしていないかを確認するため、1週間後と3週間後に再受診してもらっている」と松田氏は話す。特に顔では、患部の色素沈着を気にする患者が多いため、完全に炎症が治るまで、日焼け対策の指導を欠かさない。

冒頭の女性に対し、松田氏はステロイドと亜鉛華軟膏を伸ばしたガーゼで患部を覆うように指導した。その結果、皮膚症状が悪化することなく、色素沈着も認められなかった。

なお、ペデリンによる線状皮膚炎は、熱傷以外に、伝染性膿痂疹(とびひ)や帯状疱疹とも鑑別が難しいケースがある。「伝染性膿痂疹だと考えて外用抗菌薬を処方したり、帯状疱疹を治療するための経口抗ウイルス薬を処方する前に、時期や場所によっては線状皮膚炎の可能性を考えてほしい」。夏秋氏と松田氏はともに、そうアドバイスする。(中西 奈美)